



川の生い立ちと自然の恵み

川の生い立ち

世界を巨大な恐竜が支配していたころ、九州はまだ海の底でした。

6500万年前
恐竜の滅亡

恐竜が絶滅して哺乳類が発展をはじめる
今から5千万年前ころに、世界的な地殻変動が起こり、海底が盛り上がり、九州山地の原型になる陸地が現れました。

宮崎県は北部を除いて未だ海の底にありましたが、この時期から長い年月をかけて海底に土砂が積み、日南層群と呼ばれる地層ができました。

この日南層群も徐々に始まりは、今から1千万年かけて陸地になっていき、広渡川と酒谷川が流れる地域源流がある鰐塚山地を含め、とんどこの地層の上に成り立っています。

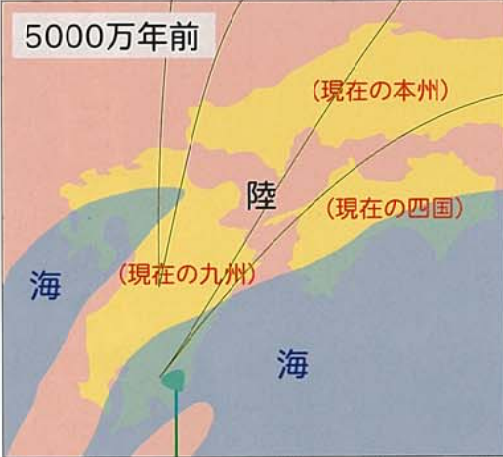


盛り上がり前ころに、は、ほ

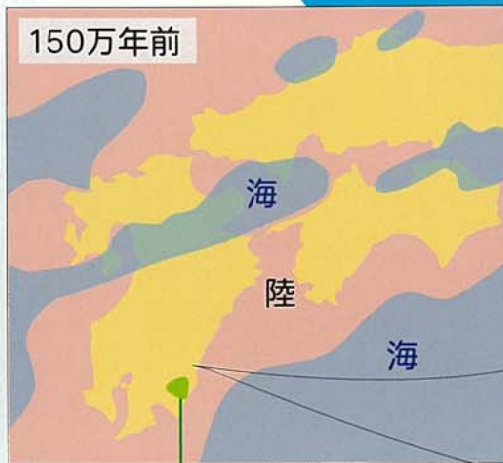
一方、この陸地の外側の海底ではさらに堆積が進んで、宮崎層群とよばれる別の地層ができました。



この2つの地層の境目は、ちょうど広渡川の流れに沿ったあたりにあります。西から東に向けて流れてきた広渡川は、ちょうど北郷小のあたりで宮崎層群でできている鵜戸山塊に衝突し、南に折れ曲がったように見えます。



2000万年前
哺乳類の発達



180万年前
人類の出現

180万年前ころからこの宮崎層群も、海水面が下がったり氷河期が訪れたりするにつれて、浸食と堆積を繰り返しながら陸地になっていきました。人類が出現もちょうどこのころです。

70万年前～
13万年前にかけて九州山地が全体的に隆起して、ほぼ現在の陸地の形が現れるとともに、広渡川・酒谷川の原型がつけられていきました。



3万5千年前
クロマニヨン人(新人)出現

この間、川の流れは土砂を下流へと運びながら、川沿いの低地や河口の三角州を形づくりしました。こうした低地を中心に次第に人々の営みが生まれ現在に至っています。

地球が誕生した45億年前から現在までを1年間にたとえると、次のできごとは何月何日だったでしょうか？

- 恐竜の誕生は？ 12月11日の正午ころ
- 恐竜の滅亡は？ 12月25日の夕方5時30分ころ
- 原人の出現は？ 12月31日の夜8時30分ころ
- 新人の誕生は？ 12月31日の夜11時56分ころ

川の歴史も人の歴史も、地球に比べればほんの一瞬のできごとですね！

自然の恵み

照葉樹林って知っていますか？

源流部の照葉樹林

広渡川と酒谷川の上流部、標高450～750mくらいの山々には、かつて豊かな照葉樹林が広がっていたと考えられています。

照葉樹林は、温暖で雨の多い地域に特有の常緑広葉樹（一年中みどりの葉が茂る木々）で構成されています。こうした木々の葉が、太陽に照らされて光り輝くことから、照葉樹林と呼ばれるようになりました。

植林事業が進み、今では一度も人の手が加わっていない自然のままの林（原生林）はほとんど残っていませんが、酒谷川上流の割岩谷や広渡ダム上流の一带などには、かなり自然に近い樹林（一度、伐採されたあと長い年月をかけ自然の林の状態に回復した樹林）が残されています。

原生林と二次林

【原生林】大昔から人の手によって一度も伐採などが行われたことがなく、自然の特徴をよく残している林のことを指します。

【二次林】人の手によって伐採などが行われたあと放置され、自然の成りゆきによって再生された林のことを指します。代償植生とも呼ばれます。長い年月がたつと、地域の環境に応じた自然に近い状態に変わっていきます。これを自然植生と呼びます。

特定植物群落として選定された照葉樹林 (第3回自然環境保全基礎調査 環境庁)



豊かな森が支える生き物たち

この一帯の照葉樹林にある代表的な樹木は、ウラジロガシ、イチイガシ、イスノキなどです。また低木や下草にもいろいろな植物が生育していて、人工林に比べるとずっと多様な生き物たちのすみかとなっているようです。たとえば、照葉樹林の樹木には年間を通じて様々な木の実をつけるものが多く、これらを食べるネズミなどの小型哺乳類がたくさん集まってきます。また沢沿いではアカショウビンなどの鳥たちが暮らしています。



ウラジロガシ



下草の花 (エビネ)



下草の花 (シュンラン)

森と川の深いかかわり

豊かな森は、降った雨がすぐに流れ去らないよう、木の周りの落ち葉を含んだ土に蓄えておく働きや、微生物が分解した養分を川に供給する役割をもっています。

つまり洪水を起きにくくしたり、清流を維持したり、下流の生き物を育んだりして、川の流れと深い関わりを持っているのです。



コケの宝庫・猪八重溪谷と猪の谷溪谷

猪八重溪谷

北郷町内を流れる広渡川の支流・猪八重川の上流部にある猪八重溪谷は、世界でも有数のコケの生育地として有名です。猪八重溪谷でしか見ることができない「ニチナンゴケ」など1,800種以上のコケが自生しています。

かつてオビケビラゴケ、チャボクサリゴケ、ヤマトクサリゴケなど、多くの新種がここで発見され、コケの研究者で猪八重を知らぬ者はいないと言われています。



猪八重溪谷

猪の谷溪谷

猪の谷溪谷は酒谷川上流の新村地区に位置しています。この谷は、北郷町猪八重溪谷とともにコケの宝庫として有名です。

この沢にはいると、岩上から樹幹、林床と至る所がさまざまなコケで覆われ、とくに木の枝に長く垂れさがったコケは人目を引きまします。

猪八重溪谷と同様に、この地域を分布の北限とする種をはじめ、多くの熱帯系のコケが報告されています。また、コケ以外にも日南地区二市二町ではこの谷だけでしか発見されていないオオチャルメルソウ、タカクマヒキオコシの他、県内でも稀なキヨスミウツボ、ヤマイバラ、ツリシュスラン、アミシダ、スジヒトツバなどがみつかっています。



溪流沿いのコケのカーテン（主にヒロハシノブイトゴケ）



絶滅が心配される希少な種

コケの種類は、暖かい地方と寒い地方では大変異なります。一般に温暖で湿った樹林では種類も量も豊富となります。黒潮の洗う宮崎県の沿岸地域には多くの南方系のコケが分布しています。その中でも、南向きの深い谷で囲まれた特有の地形条件を持つ猪八重は、コケの種類もまたその量も他に例を見ないほど豊富です。

特に、金緑色に光る大型の美しいカクレゴケや、木からひものようにブラ下がりコケのカーテンを作り、熱帯のジャングルを歩いているような気分させてくれるヒロハシノブイトゴケ・トサノタスキゴケなど、大変めずらしいコケが生育しています。

しかし近年では、照葉樹林の減少など周辺環境の変化によって、いずれも大変少なくなっており、多くの種の絶滅が心配されています。



カクレゴケ 熱帯地方に広く分布し、南九州は分布の北限。



トサノタスキゴケ 暖地の溪流沿いなど湿度の高い場所の木から垂れ下がる。

「こけ」ってなんだっけ？

ちょっと見ただけでは何だかよくわからない小さな植物は、一般に「こけ」と呼ばれています。これらは、植物界の中のさまざまなグループを含んでいます。

鮎が食べている「こけ」は、珪藻などの藻類です。

梅の木に白っぽくべたっと付いている「こけ」は、地衣類の仲間です。湿原のモウセンゴケは、被子植物です。京都の西芳寺(苔寺)の庭に生えるスギゴケなどの仲間が、植物学でいう「コケ植物」(蘚苔類、Bryophyte)のこです。

地球上の植物は、今から数億年前に、水中から陸上へ進出しました。その最初に陸に上がった植物の子孫の一つがコケ植物です。コケ植物は、緑藻類とシダ類の間に位置し、植物進化のほぼ中ほど、水と陸のはざままで生きる生態を現在も持っています。

川^{かわ}辺^へならではの植物^{しよくぶつ}たち

ツルヨシ群落^{くんらく}とヤナギ林^{りん}

ツルヨシ群落^{くんらく ちゅうりゅういき} (中流域)

ひろとがわごうのほらさかたにかわ
 広渡川では郷之原あたり、酒谷川で
 さかたにおつすかわぞ
 は酒谷乙を過ぎるあたりから、川治い
 たいとちおおはじかわ
 に平らな土地が多くなり始めます。川
 だこうなが
 は蛇行してサラサラと流れるよう
 にかわらおおあらわはじひろと
 になり、河原が多く現れ始めます。広渡
 がわさかたにかわかわみ
 川・酒谷川のこうした河原で見かけ
 られる代表的な植物がツルヨシです。



酒谷川のツルヨシ群落 (向田橋より上流をみたようす)

ツルヨシってどんな植物^{しよくぶつ}？

- 茎^{くき}の高^{たか}さは50センチメートル～200センチメートルになります。
- 湿気^{しっけ}に耐^たえる性質^{せいしつ}に加^{くわ}えて、流^{なが}れが激^{はげ}しくさまざまに変^{へん}化する砂^{すな}や石^{いし}ころ (レキ) の河原^{かわら}にとても適^{てき}しています。
- ジシバリ (地^じ・縛^{しば}り) とも呼^よばれ根^ねをしっかりと地^じ面^{めん}に密^{みつ}着^{ちゃく}させているので洪水^{こうずい}にも強^{つよ}く、砂^{すな}の流^{りゅう}失^{しつ}を防^ふぐとともに、他^{ほか}の植物^{しよくぶつ}を保護^{ほご}する役^{やく}目^めも持^もっていると考え^{かんが}られています。
- ツルヨシの群^{くん}落^{らく}を構^{こう}成^{せい}する植物^{しよくぶつ}の種^{しゆ}類^{るい}は極^{きわ}めて少^{すく}ないのが特^{とく}徴^{ちゆう}です。例^{れい}え、ヨモギ、クサヨシ、スギナ、イヌビエ、ヤナギタデなどが拳^あげられま
- ツルヨシ群^{くん}落^{らく}は、その雑^{ざつ}然^{ぜん}とした見^みた目^めから、嫌^{きら}われて根^ねだやしを求^{もと}める声^{こゑ}も多^{おほ}いのですが、次^{つぎ}のよう^{たい}な大^{たい}切^{せつ}な役^{やく}割^{わり}を果^はたしています。
 - 1) 洪水^{こうずい}に対^{たい}して抵^{てい}抗^{こう}力^{りよく}があり、土^ど砂^{しゃ}の流^{りゅう}失^{しつ}を防^ふぎます。
 - 2) 川^{かわ}の汚^{よご}れの原因^{げんいん}となる物^{ぶつ}質^{しつ}をとらえて、下^{かり}流^{りゅう}の水^{みず}をきれいにしています。
 - 3) 洪水^{こうずい}の時^{とき}などには魚^{ぎょ}類^{るい}のすみかや、避^ひ難^{なん}場^ば所^{しょ}となっ
 - 4) 多^{おほ}くの昆^{こん}虫^{ちゆう}や鳥^{とり}たちのすみかを提^{てい}供^{きよう}しています。

植物^{しよくぶつ}群^{くん}落^{らく}について

植物^{しよくぶつ}を観^{かん}察^{さつ}してみると、いろい^{しゆ}ろな種^{しゆ}がいつしよに生^{せい}育^{いく}して集^{しゆ}団^{だん}を作^{つく}っていることに気^きづきますね。こ^{しゆ}うした集^{しゆ}団^{だん}がど^{しよくぶつ}んな種^{しよくぶつ}類^{るい}の植物^{しよくぶつ}で構^{こう}成^{せい}されるかは、その場^ば所^{しょ}の環^{かん}境^{きやう}の影^{えい}響^{きやう}を強^{つよ}く受^うけま

すなわち同^{おな}じような環^{かん}境^{きやう}であれば、多^た少^{しやう}含^{ふく}まれる種^{しゆ}類^{るい}が違^{ちが}っていてもほ^にほ^{とくちゆう}似^したよう^{しゆ}な特^{とく}徴^{ちゆう}をも^{しゆ}った集^{しゆ}団^{だん}とな^{しよくぶつ}ります。こ^{しよくぶつ}うした集^{しよくぶつ}団^{だん}を“植物^{しよくぶつ}群^{くん}落^{らく}”と呼^よびま^よす。群^{くん}落^{らく}の名^な前^{まえ}の呼^よび方^{かた}は、ツルヨシ群^{くん}落^{らく}のよう^だいひように、代^{だい}表^{ひよう}する植物^{しよくぶつ}に注^{ちゆう}目^{もく}して名^な付^{つけ}けられるこ^{おほ}いよう^{おほ}です。

ヤナギ林 (下流域)

酒谷川と広渡川の合流するあたりには、かつて川岸にヤナギの林が発達しており、細くてとがった長い葉を互生につけたジャヤナギが最も多く、葉が対生のイヌコリヤナギが混生していました。数十年前までのことで、今は少なくなりました。



自然の恵み

水辺にはなぜヤナギが多い？

- ヤナギ類はとても水辺を好む植物です。ヤナギの根の大半は、地下水の水面より下にあると言われており、他の植物では生育できないようなかなり湿った環境でも生きていくことができます。
 - 流れの遅い下流の河原（粘土質を中心とした多湿環境）のように、たびたびの洪水によって土地の環境が変化するところでは、まず一年生の植物が芽を出します。続いてヨシやオギといった多年草の仲間が定着しますが、もっと安定した期間が続くと、木の仲間としてはまず最初にヤナギ類が現れることが多いようです。
 - さらに安定した環境がつづく、エノキ、ムクノキなどの他の樹木も生育できるようになり、しだいにヤナギ林はもっと成熟した河畔林に変化していきます（こうした移り変わりは“植生遷移”と呼ばれます）。
 - 川沿いにできるヤナギ林は、水辺にしっかりと根を下ろすため、自然の護岸の役割を果たしたり、水の勢いを弱める働きもあり、昔から治水の工法のひとつとして活用されてきました。
 - またヤナギ林の存在は、ほかの動物たちと深い関わりをもって、水辺の生態系を支える役割も果たしています。
- 1) イタチやタヌキなどの哺乳類が移動する通り道になります。
 - 2) サギ類やカワウの休息場所をはじめ、ツバメやムクドリの集団のねぐらとしても利用されます。
 - 3) 水際に張り出したヤナギ類は水面に日陰をつくり、魚類に隠れ場所や餌（枝や葉から水面に落ちる虫など）を与えます。



川の特徴を分類すると？

上流から下流にかけて、川の特徴が変化します

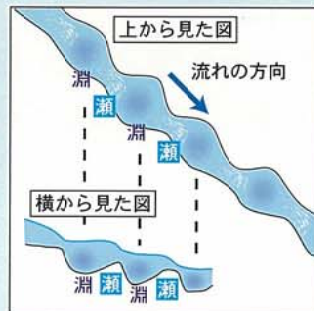
ふだん見なれた広渡川と酒谷川も、水の流れや河原のかたちに注目してよく観察すると、それぞれの特徴をもったいくつかのタイプがあることに気が付きます。



上流の特徴

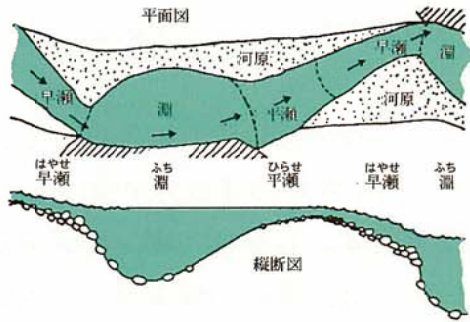
広渡川では北郷小学校あたり、酒谷川では酒谷小学校あたりを境に、川のように大きく変わります。このあたりより上流は次のような特徴があります。

- 川の勾配が急で流れもわりとはやい。
- 流れが直線的で、大きな河原や中州が少ない。
- 瀬（水深が浅く流れがはやいところ）と淵（深くて流れがゆるやかなところ）が短い間隔で続きます。ただし川の蛇行とはあまり関係なしに、1つの蛇行のあいだに、いくつもの瀬と淵があらわれることがあります。



酒谷川(日南市上白木 上津留橋)

流れによって川底が深く掘られたり、土砂がたまって浅くなったりすることで、しだいに瀬と淵が作られました。

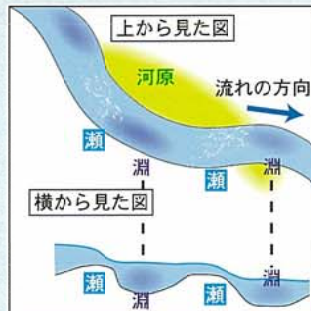


	淵	瀬	
		平瀬	早瀬
深さ	深い	浅い	
水面	静か	しわのような波	白波が立つ
流れ	ゆるい	速い	最も速い
川底	砂	沈み石	浮き石

中流の特徴

広渡川・酒谷川とも、下流の半分はほぼこのかたちです。中流は次のような特徴があります。

- 川の勾配がゆるくなり、流れもわりと遅い。
- 流れがゆるやかに蛇行し、河原や中州が多くなる。
- 蛇行にあわせてひと組の瀬と淵があらわれることが多くなります。川のカーブのいちばん外側に淵が、カーブとカーブをつなぐあいだの部分に瀬ができます。

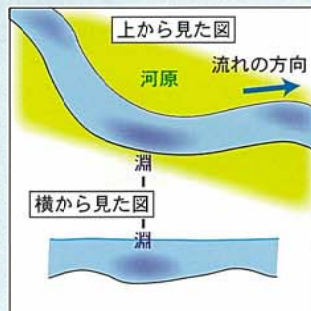


広渡川(日南市松永 松永橋)

下流の特徴

いちばん下流の、広渡川と酒谷川が合流するあたりから河口にかけては下流です。

- 流れがさらに遅くなり、水深が全体的に深い。
- 深いところや浅いところはあるが、中流のようなサラサラ流れる瀬は見られない。



広渡川・酒谷川合流点

身近な魚たちをおぼえよう！

川のかたちと魚たちのすみか

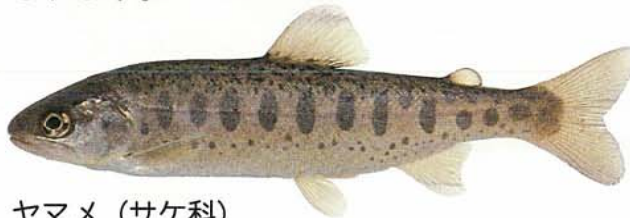
魚は、それぞれの種に適した場所で生活します。水温、流れの速さ、流れる水の量、川底の性質、岩に生えている藻類の量、水生昆虫の量、水草があるかないかなどが生活条件となります。

また広渡川と酒谷川には多くの堰があって、魚の移動の障害となっています。ボウズハゼやヨシノボリ類のように、川をさかのぼる力が強いものは、いくつもの堰を乗り越えて川をさかのぼります。しかし、ギンガメアジやキチヌのように堰をさかのぼる力が弱いものは、最初の堰より上流へは行けません。

《 広渡川と酒谷川にすむ
代表的な魚と、すんでいる範囲は
どのようになっているのでしょうか？ 》

上流の魚たち

流れが速く、水温の低い上流には、ヤマメ、タカハヤ、それにウグイが見られます。



ヤマメ（サケ科）

上流の溪流にすんでいて、30センチメートルくらいになります。流域では「マダラ」「エノハ」とも呼ばれます。



タカハヤ（コイ科）

全長10センチメートル。アブラハヤに似ていますがやや小ぶり。小さい斑点が特徴です。流域では「ハエ」とも呼ばれます。



ウグイ（コイ科）

体長30センチメートル。海に下るものと下らないものがあります。川に落ちた虫や岩についた藻類などを食べる雑食性。流域では「イダ」とも呼ばれます。

ちゅうりゅう さかな
中流の魚たち

中流はアユの主な生活場所であるほか、タカハヤ、ウグイ、オイカワ、カワムツB型、コイ、ギンブナ、カマツカ、モツゴなどのコイ科の魚、ボウズハゼ、ヨシノボリ類*1(P47)、ゴクラクハゼなどのハゼ科の魚の生活場所となっています。さらに、ナマズやメダカも見られます。



自然の恵み



アユ (アユ科)

大きいものでは30センチメートルくらいになります。生まれた子供は秋に海へ下り、次の年の春に戻ってきます。川では岩に付いた藻類を食べ成長しますが、秋に産卵した後に死んでゆく1年の短い生涯です。



オイカワ (コイ科)

浅瀬で群れになって泳ぐ姿がよく見かけられます。夏に、底質が砂や小石のところで産卵します。



トウヨシノボリ (ハゼ科)

全長7センチメートルとけっこう小さい。ヨシノボリ属には他にも色や形が異なる仲間が多いです。



コイ (コイ科)

体長60センチメートル。大きいものは1メートルを越えます。流れがゆるくて深い淵などで暮らしています。



ボウズハゼ (ハゼ科)

体長は5センチメートル。生まれるとすぐ海に下り、春になると再び川を上りながら成長します。吸盤を使って急な岩でも登っていきます。



カワムツ (コイ科)

体長10～15センチメートル。体の一本線が目立ちます。同じ仲間のオイカワにくらべ、岩のあいだなどに隠れていることが多く、開けた場所にあまり出てきません。



ゴクラクハゼ (ハゼ科)

ヨシノボリの仲間。全長8センチメートルくらいで、体に5～6個のにじんだような斑点がみられます。



カマツカ (コイ科)

全長10～20センチメートル。コイ科ですがあまりコイに似ていません。驚くと砂にもぐり眼だけ出して身をひそめます。

かわのぼり
 川に上ってきた
 ハゼ科の稚魚を「ノボリコ」
 と呼んでいます！

下流の魚たち

広渡川と酒谷川の合流するあたりから河口にかけてが下流となりますが、下流はほぼ全域、海水の影響を受ける感潮域となっています。下流に出現する主な魚は、カワアナゴ、ウロハゼ、チチブ類*2、ヒナハゼ、マハゼなどのハゼ科の魚のほか、ユゴイ、コトヒキ、ミナミイケカツオ、ギンガメアジ、ロウニンアジ、ヒイラギ、キチヌ、ボラ類などがあげられます。



ボラ（ボラ科）

大きくなるにつれ呼び方がかわるため、出世魚といわれます。60センチメートルくらいになります。小さいときはハクと呼ばれ、川に入ってきます。30センチメートルくらいになるとイナ、それ以上ではボラと呼ばれます。さらに最大級のはトドと呼ばれます。



チチブ（ハゼ科）

全長8センチメートルくらいになるハゼの仲間です。顔の斑点の細かいのがチチブ、大きくてまばらなのがヌマチチブです。

感潮域とは、河川の海に近い場所で、潮の満ち引きの影響を受ける範囲を指します。また、川の淡水と海水が混ざった水のことを汽水と呼びます。

河口には、砂や泥でできた干潟が広く発達します。干潟には、微生物から貝や小魚まで、多種・多数の生物が生息しているだけでなく、彼ら生き物が水質をきれいにするという大切な機能を持っています。

川底の動物

ふだん、あまり気にとめることのない川底にも、いろいろな生物がすんでいます。例えば甲殻類と呼ばれるカニやエビの仲間。他にも、虫や貝などのたくさんの動物がすんでいて、彼らをまとめて「底生動物」と呼びます。広渡川・酒谷川の底生動物の中で大型のものと言えば、モクズガニ・テナガエビ類があげられます。いずれも、幼生(子供)のころは汽水域で過ごし、その後、川を上って淡水域で生活します。



モクズガニ
「はさみ」が毛でおおわれています。流域ではヤマタロウガニとも呼ばれています。



テナガエビ
オスの「はさみ」がとても長いのが特徴です(写真はメス)。流域ではダクマエビとも呼ばれています。

外来魚や堰の影響を考えてみよう

環境省によって絶滅危惧Ⅱ類に指定されているメダカ、宮崎県レッドデータブックで絶滅危惧Ⅱ類のアカメおよびドジョウ、準絶滅危惧種のナマズ、情報不足種のモツゴおよびカワアナゴなどの希少種の存在にも注目する必要があります。これらの魚はもちろんのこと、他の魚に関しても生活環境を保護していくことは大切です。そのことに関連して、ブラックバスなどの外来魚は、生態系に大きな影響を与えますので、放流は絶対にいけません。

外来魚

今まで生息していなかった地域に、放流など、自然状態では通常起こり得ない手段によって移動し、そこに定着して自然繁殖するようになった魚

自然の恵み

広渡川と酒谷川の魚の分布を考える上で重要なことは、多くの堰の存在です。これらの川には、農業用水あるいは工業用水を取水するための堰がいくつも造られています。これらの堰は、通し回遊魚*3の移動の妨げとなります。

広渡川では、河口から16キロメートル付近にある郷之原井堰よりも下流の堰、そして酒谷川では河口から12.6キロメートル付近にある向田頭首工よりも下流の堰には魚道が設けられています。しかし、川をさかのぼる能力は魚種によって違います。ボウズハゼやヨシノボリ類のように川をさかのぼる能力の高い魚は、魚道のある堰はもちろんだこと、魚道がなくとも小さな堰であれば、乗り越えていくことができます。しかし、ギンガメアジやキチヌのような魚は、堰がなければ、塩分のない真水の中であつても、かなり上流まで川をさかのぼりますが、堰があると、魚道が設けられていても、その構造によっては移動ができなくなってしまう。

川は、そこに棲む生物を守り育てているばかりでなく、陸上の栄養分を水に溶かして海へ注ぐことにより、海の生物も育てています。河口の近くには、さまざまな生物が生活する豊かな海が広がり、海の漁業にも役立っているのです。

《ヨシノボリ類*1》

シマヨシノボリ、オオヨシノボリ、トウヨシノボリを含む。

《チチブ類*2》

チチブ、ヌマチチブを含む。

《通し回遊魚*3》

一生のある時期を海で、別の時期を川で過ごすため、川と海の間を行き来する魚類。

このほか、普通の観察では見つけにくいので、ここでは挙げませんでした。ウナギは広い範囲に分布しているものと思われまふ。また、オオウナギがすんでいる可能性もあります。人の手によって放流されている魚には、ヤマメ、アユ、それにコイなどの水産的に重要な魚類が挙げられます。生態系を乱す有害魚とされているブラックバスも確認されています。

水辺に集まる鳥たち

ひろとがわ さかたにがわ りゅういき しゅ い じょう やちよう せいそく
 広渡川、酒谷川の流域には、84種以上の野鳥が生息しています。またダ
 ム湖が2つあることから、オシドリやその他のカモ類など水鳥も渡来・生
 息しています。

上流の山地

りゅういき さんち けわ ぜつめつ きく に るい もう
 流域の山地はかなり陰しく、クマタカ（絶滅危惧II類）・ノスリなどの猛
 禽類やコシジロヤマドリ（その他の保護上重要な種・宮崎県鳥）、カッコ
 ウ（準絶滅危惧）・ホトトギス・アオゲラ・コゲラ・オオルリ（準絶滅危
 惧）・サンコウチョウ（準絶滅危惧）・ミソサザイなどの山地に生息する
 鳥類が見られたり、鳴き声を聞くことができます。

上流域（郷之原から上流）

じょうりゅういき ごう の はら じょうりゅう
 アオサギ・オシドリ・ヤマセミ、カワガラス、アカショウビン（準絶滅危
 惧）、ハシボソガラスなどが見られます。

下流域（郷之原から河口）

かりゅういき ごう の はら かこう
 カワウ・コサギ・アオサギ・ササゴイ・アマサギ・ツクシガモ（絶滅危惧
 IB類）・オシドリ・マガモ・カルガモ・ヒドリガモ・アメリカヒドリ、
 コガモ、セイタカシギ・イソシギ・キアシシギ・コアジサシ（準絶滅危
 惧）・カワセミ・ヒヨドリ・ムクドリ・ハシブトガラスなどを、水面や岸
 辺で見ることができます。

とく かこうぶ どうき るい しゅうだん とらい ち きんねん
 特に河口部は、冬期カモ類の集団渡来地になっています。近年カワウが
 100羽以上渡来するようになっており、毎年集団ねぐらをつくっています。

上流域

クマタカ ハイタカ*

ウグイス メジロ エナガ シジュウカラ

キジバト ハシボソガラス ハシブトガラス

ホオジロ ミヤマホオジロ* アオジ*

キセキレイ ハクセキレイ* セグロセキレイ

タヒバリ* ビンズイ*

カワセミ ヤマセミ アカショウビン**

オオルリ** カワガラス

ササゴイ** ゴイサギ アオサギ

コサギ チュウサギ** アマサギ ダイサギ

カワウ*

カイツブリ

オシドリ*

カルガモ* マガモ* コガモ* ヒドリガモ*

イソシギ キアシシギ*** クサシギ***

下流域

チョウゲンボウ*

猛禽の仲間

河畔林にすむ鳥の仲間

ホオジロの仲間

セキレイの仲間

カワセミの仲間

サギの仲間

ウの仲間

カイツブリの仲間

カモの仲間

シギの仲間

無印：留鳥 *：冬鳥 **：夏鳥 ***：旅鳥



◀クマタカ (タカ科)
森の王者と呼ばれる森林性の猛禽類。生息数が非常に少なくなっています。



▲カワセミ (カワセミ科)
「空飛ぶ宝石」と呼ばれるコバルト色の美しい鳥です。水中にダイビングして小魚を捕らえます。



▲キセキレイ (セキレイ科)
溪流や平地の川岸に広く生息しています。水辺を活発に歩き、昆虫やクモをとらえて餌にします。



◀ダイサギ (サギ科)
シラサギと呼ばれる仲間には、ダイサギ、チュウサギ、コサギと、大きさによって名付けられた代表的な3種がいます。



▲カイツブリ (カイツブリ科)
潜水が得意な茶色の小さな水鳥。主に沼や湖にすみませんが。秋冬には川の下流域でも良く見られます。水草の葉や茎で水に浮いた巣を作り繁殖します。



◀マガモ (カモ科)
冬になると日本にやってくる代表的なカモ類です。イネ科の植物の実などを主食としています。



◀カワウ (ウ科)
顔が白く体は黒い大きな水鳥。木の上に集団でねぐらを作ります。渡りをして、集団繁殖をします。



▲イソシギ (シギ科)
河口部の浜や干潟、川岸でカニやゴカイをついばむ姿が見られます。

ほ乳類と昆虫類

豊かな森とほ乳類

広渡川・酒谷川を取り囲む山地は北に鱈塚山・柳岳の連山が並び、東は岩壺山・郷谷山、中央に小松山、西には男鈴山などの山岳に囲まれています(P.4~5の地図をもう一度見てみよう!)。これらの山地は、50年前にはいずれも常緑広葉樹林でしたが、今では自然林が切られ、スギ・ヒノキなどへの人工林化が進んで、野生動物が生息できるような林は少なくなりました。このことは100年以上昔、このあたりの物産としてシカ・イノシシ・キツネ・イタチ・ノウサギなどの捕獲頭数が100頭以上あったという記録からも推測できます。

広渡川・酒谷川流域には、部分的に地形の険しい所があり、溪流は一年中枯れることなく清水が流れています。山地は照葉樹林と人工林が茂り、中型以下のほ乳類の生息地となっています。その主な種は、ジネズミ(情報不足)・カワネズミ(準絶滅危惧)・コウベモグラ・キクガシラコウモリ・ニホンザル・ノウサギ・ムササビ(準絶滅危惧)・カヤネズミ・アカネズミ・キツネ・タヌキ・イタチ(準絶滅危惧)・アナグマです。非常に数が少ないとされるカワネズミは、広渡川の源流に近い板谷で発見されたことがあります。



キクガシラコウモリ



ニホンザル

◎ネズミの仲間

アカネズミ
ヒメネズミ
ハツカネズミ

◎ウサギの仲間

ノウサギ

◎トガリネズミの仲間

ジネズミ
カワネズミ

◎イタチの仲間

イタチ
チョウセンイタチ
テン
アナグマ

◎モグラの仲間

コウベモグラ
ヒミズ

◎イヌの仲間

キツネ
タヌキ

◎リスの仲間

ムササビ

◎イノシシの仲間

イノシシ

◎コウモリの仲間

キクガシラコウモリ
アブラコウモリ

◎サルの仲間

ニホンザル

とくちょう むし
特徴ある虫たち

ひろ と かわ さかたにかわりゅういき れい
広渡川・酒谷川流域には、例として
か き こんちゅう せいそく
下記の昆虫が生息しています。



ゲンジボタル

- ◎ゲンジボタル (食物：カワニナ)
ほしくら ふ きん せいそく
星倉付近に生息
- ◎ヒサマツミドリシジミ (絶滅危惧Ⅱ類、食草：ウラジロガシ)
いの は え わにつかやま ふ きん せいそく
猪八重、鰐塚山付近に生息
- ◎タテハモドキ (食草：オギノツメ)
ごう の ばら おおふじ うち の た かりゅうへい や ふ いったい せいそく
郷之原、大藤、内之田、下流平野部一帯に生息
- ◎ヒオドシチョウ (食草：ヤナギ類)
わにつかやま ふ きん せいそく
鰐塚山付近に生息
- ◎ツマベニチョウ (絶滅危惧Ⅱ類、食草：ギョボク)
にちなん し せいそく
日南市などに生息
- ◎ルーミスシジミ (絶滅危惧Ⅱ類、食草：イチイガシ)
きたごうちょう せいそく
北郷町などに生息
- ◎ネアカヨシヤンマ (絶滅危惧Ⅱ類)
にちなん し せいそく
日南市などに生息
- ◎アオカナブン (食物：樹液)
ほしくら ふ きん せいそく
星倉付近に生息
- ◎シロヘリハンミョウ (準絶滅危惧、食物：ハエ類)
にちなん し せいそく
日南市などに生息

「絶滅危惧」「準絶滅危惧」「情報不足」……

この言葉の意味は？

かんきょうしょう ぜつめつ や せいせいぶつ げんじょう
環境省は、絶滅のおそれのある野生生物の現状について
まとめた冊子 (レッドデータブック) を作っています。
これらの言葉は、この冊子に載せられた生物が、どのよ
うな理由で選ばれたのかを示しています。詳しくは図書
館などで、レッドデータブックを読んでみてください。
みやざきけん じちたい じちたいばん さっし
宮崎県などの自治体も、自治体版の冊子をまとめている
ところがあります。



すばらしい景色



三ツ岩林木遺伝資源保存林

約千本の杉が、植林の歴史を今に伝えています。平成元年には、林木遺伝資源保存林※にも指定されました。
 ※簡単に言うと、植林を支えてきた木を、森ごと守っていくことを目的としています。

小布瀬の滝

姿の美しいことはもちろん、静かでおごそかな雰囲気、身も心も洗われるようです。



飴肥の朝もや

雨上がりの朝、飴肥の街はもやに包まれていました。伝統的な町並みにかかったベールが、よく似合います。



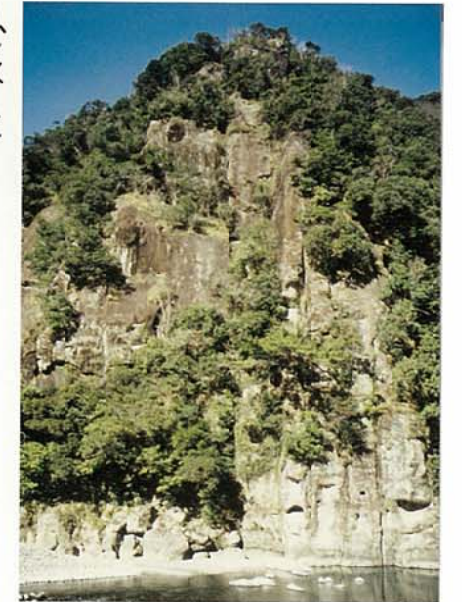
猪八重溪谷

駐車場から3キロメートル弱。いくつも連なる滝を指して進む道は、まさに秘境です。



蜂之巣溪谷

両側に山が迫り、瀬を走る川の水がとても元気に見えます。



梅ヶ浜

堀川運河がなかったころは、ここを弁甲筏が流れて行きました。晴れた日の美しさは、今も変わりません。

